

不思議なヴァイオリン

誰もどうやって、この最も優れた楽器の一つが日本に行き着いたのかわからない

東京のひっそりとした街角の楽器店の日常の中にそれは起こったのである。楽器職人の庄司昌仁氏は3年間以上、仕事場で取り組み続けていた。最初はどのように取り組みればよいかわからなかった。1890年頃のものと思われる木材は古くもろそうで、どうやって8本の弦の圧に耐えられるのか。庄司氏は今までにこのような楽器に出会ったことがなかったが、彼の上司が壊れた楽器を購入し、庄司氏は楽器を知ることができるようになるのである。2012年当初はどこから取り組みればよいかわからなかったが、やってみる以外に道はなかった。少しずつ少しずつパズルの解は軌道に乗った。そして今すべてが解けた。

庄司氏は、シャツとネクタイの上から緑色の仕事用サロンを身に着け、裏からドア枠を超えて店先に入った。手にはケースを持っている。部屋の中央のテーブルの上に彼はそれをそっと置く。すると彼は一歩下がり、日本のハルダンゲルヴァイオリン界の母でもある山瀬理桜にケースを開けることを託す。二つのロックがカチッと鳴り、ふたは開かれ、暗い木材が姿を現す。山瀬氏は微笑む。「とても綺麗ですよ。」ノルウェーの歴史文化の宝が蘇生した。本物のヘランドの（ハルダンゲルヴァイオリン界のストラディヴァリウスとも言われるメーカーの楽器）ハルダンゲルヴァイオリンが日本で新しく生まれ変わったのである。

ヘランドというハルダンゲルヴァイオリンメーカーは4世代に分けられ、ヨン・エリクソンがスウェーデンとの戦争からテレマルクのボーに戻った1814年までさかのぼる。彼はヘランド地域の地主の娘と結婚し、土地の名前を受け継いだ。そこで彼はハルダンゲルヴァイオリンを作り始めた。最初のヘランドのハルダンゲルヴァイオリンは1820年頃に作られたと言われており、1600年代半ばにハルダンゲル地方にて作られた最も古いハルダンゲルヴァイオリンとあまり変わりはない。

「彼の息子のエリック・ヨンソン・ヘランドの代のものからが有名になります。彼はハルダンゲルヴァイオリンをより現代のハルダンゲルヴァイオリンに近い形のものへ変えたのです。」ボーの地域歴史家・民族音楽評論家のアスビョルン・ストーレスン氏は言う。

ストーレスン氏によると、最初のハルダンゲルヴァイオリンはもっと小型の楽器で、地域の人々の家の中で演奏されることに適していた。しかし1800年代になると、ノルウェー全体で、他のスカンジナビア諸国とは違う個性を出していくべきだという考えが広がった。ノルウェー独自のものは全て推しだされた。突然ハルダンゲルヴァイオリン奏者は大きなコンサートでの演奏を依頼され、会場の一番後ろまで届く大きな音の出る楽器が求められたのである。ヘランドはこの動きに挑戦した。ヘランドのハルダンゲルヴァイオリンはより大きく、厚く、平たくなり、現在のハルダンゲルヴァイオリンのようにヴァイオリンに似た形状になった。

「どのくらいの数のヘランド・ハルダンゲルヴァイオリンが現在も存在しているかは分か

らないが、間違いなくものすごい数が生み出されています。しかし東京で発見されたことは驚くべきことです。どのようにそこに行き着いたのか想像もつかないですね。」

では具体的にどのように、この古いハルダンゲルヴァイオリンは庄司昌仁氏の作業台の上にたどり着いたのか。2012年に彼の上司がロンドンのオークションで、1200ポンド（約11,000クローネ）のパーツとなってしまったハルダンゲルヴァイオリンを購入した。上司本人も庄司氏も一体どんなハルダンゲルヴァイオリンを手に入れたのか全く分からなかったが、オークションハウスによると、1890年頃に作られたものであろうということだ。ドイツでヴァイオリン製作を5年間学んだ庄司氏は、今まではクラシックヴァイオリンのみを扱っていた。壊れたハルダンゲルヴァイオリンを組み立てることで、ハルダンゲルヴァイオリンの構造を学び、日本のハルダンゲルヴァイオリンを、日本でも修理出来る様になることが目的だった。

2013年秋に楽器店にあるお客さんが訪れた。東京で「ハルダンゲルヴァイオリン音楽学院」を運営している山瀬理桜は、ノルウェーからのハルダンゲルヴァイオリン奏者クヌート・ハムレ氏とフランク・ローランド氏を迎えていた。彼らが楽器店を訪れたとき、庄司氏はまだパーツであったハルダンゲルヴァイオリンを見せた。裏板、表板、ドラゴンヘッドのついたヘッド。

「思わず口が開きました。私のように生涯でたくさんのハルダンゲルヴァイオリンを見てきたら、その楽器の価値がすぐに分かるのです。それはノルウェーでもトップのメーカーのものに違いありませんでした。」クヌート・ハムレ氏は当時を思い出す。

ホルダランド県の県演奏者として活躍するフランク・ローランド氏は、その装飾と模様をハルダンゲルヴァイオリン民族博物館でも見覚えのあるものだという。

「大きなバラの模様は、ヘランド・フィドル特有のものでした。それに加えて縁に真珠が施されていました。とても素晴らしい楽器でした。」彼は思い出す。

畏敬と汗であふれた指でハムレ氏とローランド氏はパーツを手に取り、じっくりと観察した。裏板にはメーカーのサインが書いたラベルがあることが普通である。ラベルはあったが、サインは古く不鮮明だった。庄司氏は急いで拡大鏡を持ってきて、ローランド氏はサインを読み取ることができた。それは3代目のグンナル・オラブソン・ヘランドのものであるに違いなかった。

「クヌートと私は顔を見合わせ、なんてことだ！と言いました。最も高額なヘランド・フィドルは200,000クローネにも上ります。かなりお得なバーゲンが行われたとも言えます。」ローランド氏は言う。

クヌート・ハムレ氏は庄司氏に向き合い、彼らの発見を述べた。

「これは宝のような楽器であることを説明しようと思いました。彼は頷き、驚いた様子でした。彼がどのくらいノルウェーのハルダンゲルヴァイオリンの歴史を理解し、その楽器がどれほどの価値があるか受け入れられるかは分かりません。」

彼らもまた庄司氏に楽器の再生をお願いした。この春、その楽器は完成した。

東京のオフィスタイムの真ただ中、楽器店ミュージックプラザでは電話が鳴り、客が楽器の修理依頼や受取りのために出入りする。山瀬氏が新しく生まれ変わったヘランド・ハルダングルヴァイオリンを構えて「ファニトゥレン（デビルチューン）」を演奏し始めると、東京の真ん中に突然ブーナド（民族衣装）を着たノルウェー人が現れたようだ。店内で楽器を見ていた客もパソコンを見つめていたスタッフも山瀬氏のほうを振り返って見つめる。庄司氏も後ろのほうに下がりながらも楽器の音色に満足そうに頷く。彼はヴァイオリンを演奏するが、ハルダングルヴァイオリンの演奏はまだ習得していない。

最後の音が鳴り終えたとき、自然と拍手が沸いた。山瀬理桜氏は短くお辞儀し、ハルダングルヴァイオリンをテーブルに静かに置く。

「とても良い音色だけど、とても久しぶりに鳴った音なのだということが分かりました。」彼女は言う。

庄司氏が修理をしている3年間、山瀬氏は度々訪れ、アイデアや実際の楽器を見せた。ある期間、庄司氏は彼女の楽器を借りて構造を研究したこともあった。

「彼女はエキスパートで、とても力を貸してくれました。彼女はノルウェーに何度も訪れ、この音楽に深く精通しています。私にとって重要なのは、この楽器を作った職人が望んだ本来の姿により近づけることです。」庄司氏はいう。

一方で彼はいくつかのオリジナリティを入れていた。指版にはクラシカルなハルダングルヴァイオリンの模様ではなく、桜の模様があしらわれている。

「理桜という名前には桜の意味が含まれています。だから桜の模様にしました。」庄司氏は言い、側面に書かれた山瀬理桜のサインを見せる。山瀬氏自身も笑顔になる。

「感動してしまいます。」山瀬氏は言う。

彼らはすでにノルウェーのハルダングルヴァイオリン奏者フランク・ローランド氏にこの楽器の写真を送ったという。彼は楽器の完成を喜んでおり、日本風のアレンジも加わった新しい楽器の生命を楽しみだという。

問題はヘランド・フィドルの日本の環境の対応である。特に日本の高温多湿の環境にどう順応できるかが問われる。

「まだ日本の夏を経験していない楽器なので、しっかり見ていきたいと思います。何か起きたときは、また調整を行います。」庄司昌仁氏は言う。